

世界が尊敬した日本人(45)

世界を股にかけた報道写真家 岡村昭彦

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

< 衝撃のデビュー作 >

「南ベトナム政府軍兵士が農民に水責めの拷問を加えるシーン」などベトナム戦争の実態を告発する九頁のスクープ写真が、アメリカの写真週刊誌『ライフ』(一九六四年六月十二日号)のトップを飾った。「第二のロバート・キャパが生まれた」と絶賛された。報道写真家・岡村昭彦のデビュー作であり、一躍、その名は世界にとどろいた。

この写真の事前情報をつかんだラスク米國務長官は、載せないように圧力をかけたが、『ライフ』側は岡村のネガを全部回収して、「やらせ」がないかどうか一枚一枚をすべてチェック、ないことを確認して、一挙に掲載した。これを見たニクソン副大統領は床にたたきつけて、怒り狂ったといわれる。

『ライフ』は当時、約八百万部の世界一のグラフ雑誌で、世界中のカメラマンやジャーナリストは、この雑誌を目指してしのぎをけずっていた。

翌昭和四十年(一九六五)、当時三十六歳だった岡村は、世界が注目していた解放民族戦線副議長との会見にも成功し、「米海外記者クラブ最優秀報道写真年度賞」に輝いた。同時に日本で出版した『南ヴェトナム戦争従軍記』(岩波書店)がベストセラーになるなど、岡村の報道が世界の目をベトナム戦争にひきつけるきっかけとなった。

[知の冒険者]

岡村は昭四年(一九二九)二月、東京で海軍大尉の長男に生まれた。家系には日本赤十字創設者の佐野常民や、東大病理学の権威・緒方知三郎がいる名門の出であった。東京医専(現東京医科大学)を中退し、北海道のトラピスト修道院で一年半過ごした。敗戦後の飢えと戦いながら一家を支え、米軍相手のヤミ商売で英語力を養い、部落解放運動や、炭鉱での生活に身を投じて週刊誌記者となった。それまでカメラは嫌いだったが、写真こそ世界共通言語だとして、三十四歳で通信社カメラマンとなり、ベトナム戦争の取材に向かった。

「今、人間はどこに立っているか」をテーマに追い求めた岡村の出発点は、殺される側のベトナム・ジャングルであり、そこから問題を深く広く掘り下げた。浜名湖畔にある舞阪町(現静岡県浜松市)の実家を拠点とする一方、殺す側のケネディ大統領のルーツをたどってアイルラン

ドに渡り、ダブリンに生活の拠点を置き、世界を複眼的、歴史的な視座から記録していった。一九六八年には世界の紛争地を回り、アイルランド紛争やアフリカ・ピアフラの独立戦争の飢餓や内戦取材、中南米にも赴いた。国内では水俣病や、地元の浜名湖の水質汚染を防ぐ公害反対運動を支援し、地球環境問題に取り組んだ。

その点では、岡村は写真ジャーナリストを超えた市民運動のリーダーであり、世界取材して回った知の冒険者であった。ダブリンやロンドンの図書館で独学で勉強し、世界中の古本屋から膨大な古書を集め、その数万冊(うち四千冊が洋書)にのぼった。それらを収蔵した舞阪の書庫を「人民文庫」と命名し、世界を変革するための知識庫として人々に開放した。

〔難問に挑みつけて〕

五十一歳となった岡村は、ベトナム戦争で米軍が使用した枯葉剤の影響の問題意識から、バイオエシックス(生命倫理学)について関心を深める。ジョージタウン大学教授・木村利人と二人三脚で全国を講演し、医者や看護婦たちと勉強会を立ち上げて、この分野での先駆的な活動と執筆を行った。

さらに彼の眼は、病院における患者の人権や看護ケア問題、死んでゆく者の人間としての権利と、看取る側から死にゆく者をケアするホスピス運動へとたどりつく。世界のホスピス運動は一九六七年のロンドンの「セント・クリストファー・ホスピス」の設立がはじまりだが、岡村は世界各地のホスピス運動取材して、五十四歳のとき、「ホスピスへの遠い道」の連載を始めた。日本で初めてのホスピスの研究書である。

エネルギーに世界の難問に単独で挑み続けた岡村は、無理がたたったのか、昭和六十年三月、敗血症で五十六歳の若さで急逝した。

岡村に対して、「ジョン・リードや、ジョージ・オーウェル、エドガー・スノーらに匹敵する世界的ジャーナリスト」と高く評価されているが、二十年後の今、やっと論議されるようになった高齢者看護やホスピス問題を見るにつけ、岡村の目がいかに先駆的だったかがわかる。